



N=NICE VIEW(ナイスの視線) I=A=ART(芸術)&AMUSE(ましまじゅ) S=SIGHTS(見所) C=VIEW(見所) & SIGHTS(見所)
+秋
10年12月号
vol.47

発行日 2010年12月1日
創刊日 2007年1月1日
発行 株式会社ナイス
発行人 代表取締役 富田一幸
印刷 横前山企画
住所 大阪市西成区長橋3-6-33
電話 06-6563-1156
E-mail info@nice.ne.jp
HP <http://www.nice.ne.jp/>

長野公園延命寺地区のモミジ

(c) 写真家 3.5GH

第1回楽塾主催<おとなたちの隠れ家会議>

貧しくとも



幸せな社会を

<美庵&bien>がリニューアルしました

生きづらいといわれてきた青年たちがお店を経営します

そして、これまで社会を切り開き、推し進めてきた

おとなたちの語りの場が、月1度<美庵&bien>で開かれます

称して[大人たちの隠れ家会議]

第1回目のテーマは「貧しくとも幸せな社会を」でした

ファシリテーター 隠れ家会議で“貧困の反対語”を考える

翻：「おとなたちの隠れ家会議」は関西弁で言うところの「にゃんにゃんする会」と考えたい。皆でワイワイ言いながら、難しいと思われることをかみくだく。簡単と思われていることを深く考えていきたい。正しいと思っていたことが過ちになったり、一周遅れと思っていたことが最先端になったり、社会や企業との関わり・活動を通じて絶対的に信じることの出来る解=正義が見当らない。制度からもれ落ちた人々の存在に対して、差別や貧困、排除など様々な呼び方がされているが、呼び方だけではなくアプローチも様々だ。まさに混沌=カオスが渦を巻いているのが現在という感覚。こんな時は正義の追求ではなく、皆と一緒に考えたい。右も

左も、古きも新しきも一緒になって考える。はっきりさせる場ではなく、きっかけの場になれば。

第1回目は「貧しくとも幸せな社会」をテーマに皆さんとにゃんしたいと思うが、今回の僕のテーマは“貧困の反対語”を探した。20年前の同和地区調査では、定住が前提とされた同和地区住民の2割が流動する貧困の一方通行化現象に気づき、より深いネットの取り組みでは、制度からもれ落ちた人々の“最後の砦”が刑務所であったことに気づいた。難しそうなことが瓢箪からコマで明確になる。「差別」の反対語を「解放」と言い、「社会的包摶」の反対語を「社会的排除」と言う。どちらもわかるようでは分からぬ。簡単なようで難しい。話を深めながら“貧困の反対語”という、簡単そうで深い問いへのヒント



を得たいと思う。

ゲスト1 貧困にまつわる「7つの疑問」

納：「貧しくとも幸せな社会」ということだが、最近の日本の貧困は、先進国として可視化されることで、繁栄の裏面の出来事として注目されている。身近な僕が運営している都市研究プラザにおける欧米の若手の院生たちによって、日本の貧困が注目されていることも、こうした流れと関係しているかもしれない。僕のところに来る留学生で、ベルギーのジェイ君、ウイーンからのキーナ君、アメリカからのポーター君。三人のテーマは東アジアにおけるホームレスの概念整理や、貧困者が排除されずに過ごせる空間の研究だ。高度経済成長期では注目されていなかった日本の貧困が、にわかにクローズアップされているという気がする。今回は自身の研究や調査を進めホームレス支援の現場に関わる中で、おぼろげに浮かび上がるいくつかの疑問点・関心を皆さんに投げかけ、意見をいただければと思う。

1つめは「可視化される・社会が気づく以前のホームレスや貧困の実態」。1990年代にホームレス問題が1つの貧困問題として突如注目された。それ以前の時代にはほとんど話題にされていなかったにもかかわらず。これは、社会が気づかなかつたのか。そもそもそうした形態の貧困は無かったのか。

2つめは「インフォーマル・アンダーグラウンドなセーフティーネットの崩壊」。極論を言えば、地縁・血縁を離れた人々をかつてはヤクザやテキヤなどと呼ばれるアングラな闇社会が吸収してきた。現在のように困窮者があふれかえっているように見えるのは、もしかするとアングラな闇のセーフティーネットが弱体化しているのではないかという仮説。アングラだけでなく、各地でインフォーマルなハウジングのセーフティー

ネットであった社員寮や住み込みの仕事が減少している実感はある。

3つめは「適度な距離感を保つ福祉のあり方」。ホームレス支援の現場では「死ぬまで面倒をみます」というタイプもある。そこまでの支援が必要な人もいるが、そこまでするか?という人もいる。支援者もオーバーワークとなり、倒れてしまう危険性を感じずにはいられない。自由に生きたい、ほっといて、放置しといて、という人々がいるのも事実なので、オルタナティブな形として、佐々木さんが言うところの「寄港地的応援」の可能性も検討したいところだ。

4つめは「ワークフェアでもない、新しい日本型の福祉像」。様々な議論があるが、ベーシック・インカムは「お金を担保するから、サービスはないよ」と聞こえるし、有期の生活保護制度は「次のステップを目指そう」と言っているだけで、具体的な仕事のありようが見えてこない。旧来の日本型福祉は「障がい」「高齢」などラベリング型の施設福祉で、その施設の外の地域の周縁にいた人を見過ごしてきた感はぬぐえない。ラベリングされていない福祉の構築という意味では、ヨーロッパではウェルフェア（福祉）からワークフェア（勤労福祉）という取組が進んでいるが、長所も短所も明らかになりつつある。単にまねをしてのワークフェアではなく、福祉と就労の間に広がるグレーディーンで、日本型の福祉 well-being の型を発見できればと思う。

5つめは「若者のお金を稼ぎ、使うという感覚」。生活保護が通過型支援として機能せず、生活保護に安住してしまう若者の姿を見聞きするなかで、額に汗して稼いだお金を派手に使ったりする経験が欠如し、働くことの喜びや自分でお金を稼ぎ、ぱーんと使い尽くす実感がないのではと危惧したりしてしまう。実感がない若者に生活保護などで、金銭面と物質面は支援するという現在の方向性は持続可能なのか。

6つめは「マイノリティーのまちづ

ダイアローグ



くりと他住民の協働のあり方」。大阪は在日外国人や同和地区、沖縄県出身者、日雇労働者などマイノリティーをベースにしたまちづくりや活動が活発で、貧困に向き合いながら社会包摂型の先進的な取組が数多く蓄積されてきた。ただ、地域の商店街や町会、社協などと協働できているかといえば、少々疑問だ。日本の生活保護は世界で唯一といつても良いほど。それだけで地域生活を送るに十分な基準の給付金額。この生活保護を活かす視点も必要ではないか。受給者が急増するなかで、貧困を包摂してきたマイノリティーのまちづくりとして終わらせるのではなく、一緒に皆ができるヒントはないだろうか。

7つめは「施設の役割」。或る地域では、若年で比較的就労自立が望める方々が居宅保護による支援をうけ、また何らかのサポートがなければ地域生活が困難とされる方々が一時にホームレス自立支援センターに入所されている。比較的就労自立に近い層が中間施設を経由することなく、社会や支援者とのつながりをつくるきっかけがないままに、居宅で就労自立を目指す。一方で就労自立が困難とされる方を就労自立支援施設が受け入れなければいけない、ひっくり返ったような現状がある。既存の福祉で対応できない貧困などの問題があふれかえる中で、既存の枠内で設置される施設がどのような役割を担うのか。ぜひ皆さんと考えを教えていただきたい。

ゲスト² それぞれの時代の「貧困と施設」

附：現在は2つの施設長を務めているが、社会福祉法人の職員となったのは1975年の12月。本年で35年になる。その当時からの行政的な貧困問題を振り返ると、70～80年代は高度経済成長の時期と重なり、世間的には貧困が片隅に追いやりされ、釜ヶ崎など都市の寄場など限られた地域での対策として扱われていたように思わ

れる。そこには社会防衛の側面もあったが、日雇労働者が施設などで仕事のない時期やできない時期をやり過ごし、また仕事に戻っていく仕組みがあった。

様子が変わったのはバブル崩壊後、90年代に入ってからだ。徐々にグローバル化が企業を苦しめ、合理化や生産拠点の海外移転がすすみ、国内産業の空洞化の影響が目に見える形で現れ始めた。大阪は阪神大震災の復興で東京や名古屋などより若干遅れはしたが、寄場を離れた公園や河川敷にテントが見られるようになっていく。行政が手をこまねく内に、NPOなどがいち早く反応し、まだ制度のない時代だがホームレスを支えた。大阪市が行政としてホームレス対策に取り組みだした1つの契機は、オリンピック誘致でホームレス問題が浮上したからだったと記憶する。1999年にスタートした巡回相談やホームレスの実態把握がすすみ、ホームレス自立支援法が出来る前に3つの自立支援センターが設置され、各種事業も展開され始めた。ただ、あくまで従来の貧困対策の延長にあり、あくまで一時的な避難場所で気力と体力を蓄え、就労自立を目指す形ではあった。そして、リーマンショック後の貧困及び排除問題で、これは大きなエポックだった。

この3年で自立支援センターの入所者の平均年齢は10歳若返りました。一時的避難で力を蓄え、就労に戻つてもらうパターンは限界を迎えた。日本全体が疲弊し、老若男女問わず仕事を失った。つまり、労働や仕事に対する考え方の再構築を迫られているのだ。そのような状況で、行政は個人の生活を支えるための公的資金投入を選択した。それは生活保護申請受理基準の緩和などであり、受給者の急増が起こっている。一方で、貧困対策の中心を担っていた生活保護施設等の利用者は減少し、施設もその役割を改めて考えることが求められている。一時に生活保護制度等が金銭面と物質面の両面を支



援する形で、困窮者を吸収することはやむをえないが、それ以外の困窮への支援方策は見あたらない。施設も若い人の利用は増えているが、何らかの金銭や物質以外の生活環境であったり人とのつながりであったり、社会的な貧困を抱えるケースが多いように感じている。そこからも漏れた人々が、居場所も失い、犯罪に手を染め刑務所に入らざるをえない、生活の豊かさを提供できない社会が生まれつつあると思う。このような中で実感として、比較的限定された貧困や排除に対応してきた施設も単体ではなりたくなりつつある。内向きではなく、地域や各支援機関とのネットワークを組みバトンタッチしながら、利用者が施設を出てからもつながりのなかで暮らせる媒介的な役割が求められている気がする。地域には施設不要論もあるし、それを応援する議員、従属する行政もある。未来に向けて本当に必要な施設像を議論し実践する。そんな時代を迎えていた。

蛇足ながら、水内先生の質問の1つ「アンダーグラウンドのセーフティーネットの崩壊」で、崩壊といえるかどうかは分からぬが、変化を施設側の実感として紹介する。昔から施設にはヤクザ世界から足を洗った人々の利用があった。現在もある。断定できないが、昔は「仁義」という中で、世話になった施設の秩序を乱すことなく暮らしを送っていたケースが多かったのが、現在は施設を牛耳ろうとして、秩序やルールを無視する割合が増えているように感じている。

翻:いくつかの実感を述べると、「インフォーマル・アングラ界」に関して、西成の靴屋でみられた住いと仕事が一体となった業態は減ってきた印象がある。また「興業」という仕事を興すことを意味する名称には、ヤクザ系の会社や芸能、ビルメンの会社が多かった気がする。今風に言えばソーシャル・エンタープライズにつながるかもしれないが、戦後社会は

元軍人や未就学者、在日、部落など困難を抱えた多くの人々がいた。そんな時代に登場する会社は、元ヤクザや排除されてきた人々などが自身の体験から必要なものを見出し、業につなげてきた。インフォーマル・アングラといえるが、それは戦後社会を彩った様々な試みとして見直せる点があるかもしれない。

次に、若者の金銭感覚についてだが、生活保護やベーシック・インカムでは、お金を渡すだけで、お金の使い方を教える視点が欠けている。これから的生活で必要なお金の全体像を示すことなく、渡すだけというのには賛成できない。例えば、使用目的限定のアセット形成として、貯金をさせるとか。渡したお金を活かせる形にしたい。それ以外にも「放置できる支援のあり方」とか福祉や施設ではない「互助や市民力の活用」とか興味のある話題がたくさんある。

両ゲストからの提案に対し、すでに食事中のそれぞれの席に分け入り、意見を聞いてみました。施設勤務の経験上からのご意見はいかが？

O: 代替がない以上生活保護施設は必要。しかし今のままではだめ。最後まで面倒を見るというのではなく、N P O や他支援団体よりも施設は予算的に裕福だから、多様な選択肢を示し、他には出来ない、貧しくとも安定的な暮らしを提供できる役割を果たすべき。

「インフォーマル・アングラ界のセーフティーネット」については？

W: ヤクザ界は、暴対法が出来てからは幹部も一蓮托生の責任になったので、仕組みが変わったのかもしれない。

Y: ヤクザではないが、幼いころ銭湯に行くとテキヤのおじさんの見事な刺青に出会った。笑い話だが、大人になつたら（身体にあんな）綺麗な模様ができると教えてもらい、それをを目指してちゃんと生きようと思っていたことがある。



適度な距離感を保つ支援というものはありますのでしょうか？

M：ネットワーク型の支援でも、実際に支援をする現場が疲弊しているのは事実。もっともっと応援できる体制を構築してほしい。

F：就職困難者を雇用する中でやりすぎの支援が自己決定をないがしろにし、エンパワーメントでは逆効果かなと考える事もある。ほったらかしの支援というか、適度な距離を保つ良い加減の支援を考えている。

S：必要な支援はいるが支援をしそうると弱者を演じる者もいる。弱者ととらえず個々のニードやモチベーションの違いを意識しながら支援することが求められる。

T：最近の西成在日高齢者調査で明らかになったのは、高齢者だけで居住する持ち家世帯が多かったこと。家を持ち、靴屋を継いでもらい、家も継いでもらうということだったのかなと考えられるけど、靴屋が苦しくなってそれが覆ってしまった。でも、福祉というか暮らしを自らが所有するという発想が在日の方々にはあったのかな。と感じている。福祉は供給されるものなのか、所有するものなのか。答えはわからないが、なかなか面白い視点の1つだ。

水内先生からは、「若者にはお金を稼ぎ、使うという実感が希薄ではないか」という仮説を提案されていますね。

W：昔のように上司が派手に奢ることもなくなった。貧困層だけでなく、誰もがお金に不足している。その中で自分の手でお金を稼ぎ、満足感を得るのは、簡単ではない。

T2：昔と今の裕福の概念は変化している。昔はぼろぼろの服を着て鼻をすすついても、在日の中では相対的に裕福な方だと感じていた自分がある。何を裕福とするのだろうか。現在の“幸せ”とは何だろうか。携帯代に3～4万円を使う若者もいる。理解は出来ないけど、サービスや流行と名を変えてそういう状況に追い込んでいる社会があるのは事実だと思う。

T：昔は貧乏だけど、一生懸命働いて元気。という人がいっぱいいた。

「新しい日本の福祉像」ともいうべき論点を築きえるのでしょうか？

N：就労支援に携わる立場として、福祉と就労の関係の中で、就労支援はあくまで働く過程の問題であって、居心地良すぎる場所になっては困るという意識がある。

F：生活保護が急増する中で、生活保護が仕事の価値観よりも大切だという状況が生まれつつあると感じている。金銭以外の仕事の価値を考えていきたい。

N：行政的には就労支援をどの部局に配置するのか。という問題が残る。行政の就労支援という概念は福祉側からの発想であり、就労支援の出口づくりでは、労働や産業部局が力を発揮しなければならないが、その部局もためらいがある。

派遣村以降、貧困論争がかまびすしいですか？

Y：仕事だけでなく衣食住の困難と対面している。生活の基礎に希望が見いだせない状況では、理屈ではなく実感としての貧困があるのではないか。また、排除を生んでしまうシステムも実際にあるのではないかと考えている。でも、この状況に対して答えを見いだせない自分の貧困もある。そんな自分にできることとして、何かに会える場を提供したり、体験できたりする‘おおきなお世話’を躊躇せずに実行していきたい。

K2：就職困難者を雇用すると、雇用・被雇用の関係だけではなく、従業員同士＝仲間がサポートする状況が生まれている。雇用する側として、全てが出来るわけがない。雇用する側として働きやすい職場環境、人間環境づくりに努めている。それがスタートだけの雇用だけでなく、雇用を継続するポイントだろうと思う。

K3：DVなどの相談を受けることが多いが、縦割りでは対応できないと感じている。女性の労働環境の問題は現



ダイアローグ

在のワーキング・プアに通じる。でも、社会が問題にしたのは男性のワーキング・プアが顕著になってから。ここには差別・貧困・部落などの問題では把握できない大きな問題が残っているという気がする。女性の存在を軽視した貧困という現象に古い新しいはあるのか。

Y: 経営者という立場で貧困への対極理念としては、①良い会社をつくろう。②良い経営者になろう。③良い経営環境をつくろう。という考えを持っている。この3つが出来れば、貧困の解決には近づくだろうと考えている。また、人材育成なくして経営は成り立たないと考えている。その中で、働きづらさを抱えた人々の人材育成を目指して、企業・福祉・教育・親の会などと協力しL LPを結成した。単なるネットワークではなく、機能するネットワークとして、ややもすれば責任転嫁しあう関係者が協力して事業をすすめるのは1つの方向性かもしれない。

T: 解放運動が進んできた同和地区でも、運動を見つめなおす機会かもしれない。3世代に渡って生活保護を受給する世帯もあれば、新たな生活困窮層が集中する現象もある。かつては明らかな部落差別が残っていたと思うが、現在はすべてを部落差別と片づけることはできない気がしている。

若い世代からの発言です。

H: 海外の暮らしで実感することは、同じ背景・環境で育った人とちょっとした悩みや出来ごとを話したいということ。同じような感覚を持つ人々と、ベタベタではなく、ほどよいつながりをつくることは暮らしに必要なかな。

S2: メイド喫茶で働く同僚は、母子家庭で育った割合が多い気がする。メイド喫茶は地元出身のおっちゃんオーナーが多く、個々の状況に応じ融通が利きやすく、仕事をするものにどつては働きやすい職場環境になっているかもしれない。

次回のゲストから予告がありました。

観: 韓国と日本の寄付文化は大きく違う。

芸能人はテレビ番組の賞金を一切持ち帰らず、寄付するのが韓国的方式。日本は自分の所得にしてしまう。この違いはどこにあるのでしょうか?詳しくは次回のおとなたちの隠れ家会議でお楽しみに!

ねばならないから一緒に考えることを ファシリテーターから

畠: 多くの意見が出たがまとめることはできない。ただ1つ明確なのは、なんでもありの世の中になりつつあるということ。差別・貧困などが複雑に絡み合う現在は型から入ってはしまらない。それよりも自由闊達な意見交換からそのヒントを紡ぎあい一緒にやっていくよということだ。この会議はそんな場としてそれを守っていきたいと思う。今日の僕のテーマは“貧困への反対語”をわかりにくくなりに説明すると「限られた世界や閉ざされた社会で、ねばならないと議論するのではなく、みんなでどうかしながらやっていくこ」いう事だ。こんな大事な問題を役所に任したり、誰かに任せたりすることはしたくないという決意もある。最後にゲストのお二人から今日最後のコメントを。

相手の貧困と自分の貧困

奥: 貧困という言葉で何をあらわすか、何を感じるかという事だったが、意見を聞いているうちに、施設長という雇う立場で考えてみた。採用では「雇いたくない人」「雇えない人」がいるのも事実。時にはリストラを勧告しないといけないこともある。職場環境づくりを進める中で、他者への影響や職場環境の悪化などについて考えたうえでのことだが、これは自分の中にある排除であり差別であると感じた。雇わない理由は様々だが、この行為は物質やお金の貧困だけでなく、つながりの貧困に帰結せざるを得ない。もちろん、相手だけでなく私自身の貧困としても心に残



り包括できなかった、されなかつた人々への贖罪意識が現在の仕事への動機となっているのかもしれない。

実感をベースにした力強さ

納：各地でホームレス支援をする人々の6割ぐらいが、釜ヶ崎での運動経験がある方だ。その力強さはなんだろうなど考えると、かつての学生運動はグローバルな体制の中でのイデオロギーを背景にしたもので、三里塚まではそういう傾向が強かったようと思う。それが国内に目を向け出発した貧しさが釜ヶ崎の1970年代のことであったのかなと考えている。つまり、部落問題を除けば、生活をベースにした運動というのは釜ヶ崎、寄せ場にあったのではないかと。生活をベースにしているからこそ、力強いと。それは、韓国ではスラム問題に対して、ごく自然に生活のベースとなる居住に目が向いているが、日本のイデオロギー先導型の運動では居住に目が向かなかつたことや、

寄せ場育ちのホームレス支援の方々は居住に目が向いていることからもそんな感じを受けている。

最後に、皮肉な言い方になるが、学生に教える立場としては、日本にも貧しさの風景は必要なのではないか。貧しい風景がなければ、感受性を養うことが出来ないのではないかという気がしている。また部落問題では、外面向的な貧困はほとんどなくなり、次のステップとして内面の貧困にどう立ち向かうかという事になっていくよう思うが、目の当たりにできない現象に感受性を養うことの難しさを実感している。

これまで自分たちだけが正義だ、間違いないなどと言って譲らなかつた歴史から、「とにかく相互に論議をつくすことの重要さ」という、いわゆる(憲)ナイス流のあたりまえ哲学をこの会議でちょっぴり試していこうと思います。頭の訓練の始まりです。12月の<おとなたちの隠れ家会議>にぜひご参加を！（楽塾佐々木）

【記録：田岡秀朋】



2010.11.1 談話